

君は即ち春を吸ひこんだのだ

作・原田ゆう

『君は即ち春を吸ひこんだのだ』(※1)

登場人物

渡辺多蔵・・・・・・・・新美正八の父  
渡辺志ん・・・・・・・・新美正八の継母  
新美正八・・・・・・・・新美南吉の本名  
中山ちゑ・・・・・・・・新美正八の幼馴染  
畑中俊平・・・・・・・・新美正八の友人  
中山文夫・・・・・・・・中山ちゑの弟  
山本初枝・・・・・・・・正八の生徒

愛知県半田市岩滑やなべにある渡辺家。この母屋では、父・渡辺多蔵は畳屋を、母(継母)・志んは下駄屋を営んでおり、渡辺家の生活の拠点はここであるが、それとは別にもう一軒、母屋から数十メートルはなれた所に離れ家がある。そこは畳や下駄の材料置き場となっており、正八(南吉)の数多くの本もこの離れ家に置かれている。正八はここで寝起きをし、また読書や書き物などを行うことが多く、自分の部屋のように使用している。

物語の全体を通して舞台となるのはその離れ家である。  
六畳の部屋が二間ある。上手の部屋と下手の部屋。  
上手側の部屋には縁側があり、縁側の先には庭。  
また座机と座布団が置かれている。  
下手側の部屋の奥には土間があり、畳や下駄の材料が置かれ、土間の先に玄関がある。下手の壁に本棚がひとつ、本はぎっしり入れられており、その本棚に入りきれなかった本が壁に沿って本棚の高さを凌ぐほど積まれている。  
本は上手の部屋にも何冊も散在している。

①  
一九三八年三月。夕暮れ。

多蔵と志んがいる。多蔵は上手の部屋に腰を下ろし、何をするわけでもなくぼんやりと座っている。志んは玄関や縁側を行ったり来たりして、外の様子を窺い、落ち着きがない。

縁側の戸は開いている。

志ん 父ちゃっ！

多蔵 なんだあ。

志ん 落ち着かないかん。さっきから行ったり来たりしとって。戸も開け放しのままだがね。

多蔵 お前が開けたんだがや。

志ん わしらが騒いでもなんもならん。なんもならんならなんもならんので、なんもしんとただ待つしかなかろうに。忙しく動きおって、まったく目障りだわ。

多蔵 ……。

志んは部屋の中を無駄に整理し始める。例えば、きちんと整理されている本などをわざわざまた違う場所に置いたりする。時々、外の様子も窺う。

志ん (玄関から外を見て) あ！ あ、あ……(外に向かって) おうー、下駄の具合が悪くなったらいつでもこやーよ。ばあさんに今度見舞いに行くって言うたってよー。(玄関の戸を閉める) 操ばあさんとのイクちゃんだった。女のくせにたっぱのあるもんだで、兄ちゃと見間違ったわ。父ちゃ、戸を閉めやー。まんだ春になったばかりだで、さぶいやろ。風が入ってくる。

多蔵は洪々縁側の戸を閉める。

志ん 兄ちゃはなんでこんな遅いかね？

多蔵 知らん。

志ん もしや店の方に帰ったんじゃないんかや？ わし、ちいと見てくるか。

多蔵 お前、落ち着かんか。

志ん 兄ちゃがようやつと先生になるんだで、代用教員でなく本物の先生になるんだで。

多蔵 まんだ決まったわけでねえだらあ。

志ん 今度は特別だで。佐治先生の学校だで、校長が推薦して入れない学校があるかや？

多蔵 教員の口は簡単にあいとらんぎゃあ。正八よりできる奴がその口に入りよるかもしれん。

志ん 吝嗇な人間は考えとることも吝嗇だわ。

多蔵 は？

志ん おまえさんの人生そのものだわ。

多蔵 どういう意味だ？

志ん 希望を持つことができんのだわ。  
多蔵 はいでも、わしらがあいつにどんだけ期待しとったか。一銭でも家に金を入れたことがあるかや。就職してもよう続かんし。

志ん あんなところは辞めてよかったて。朝から晩まで働かせられてたつた十六円しかもらえん、東京外語まで出とつて十六円しかもらえんだて。

多蔵 そいでも働かんよりはましぞな。

志ん 鍛冶屋の久三に言われたんだわ、「正八っあんは外語出とるのにヒヨコの世話しとるかや？」ヒヨコの世話をしとつたのは研修期間だけだわ！ すぐに経理課で英語の翻訳をするようになっただわ！ と思わず怒鳴ってしまったら、あのガキ泣きよつてに。だて、お菓子を持たせて帰らせたんだがや。

多蔵 大人気ないやつだわ。

志ん 兄ちやが女学校の先生になつてくれたらこそそ歩かんでようなるのに。

多蔵 普通に歩いとるくせに。

志ん こそそしとるわ、せんべえ屋の親父がわしのことを見て、ほくそ笑んだんだわ、石拾つて投げつけたつた。

多蔵 ……。

志ん ええか、佐治先生だけでなくて遠藤先生も推薦してくださつとるんだ、二人とも帝大出の先生だて。それに兄ちやは代用教員を二回もやつとる、本もこんなに持つとるに。

多蔵 本の数は関係あらずかあ。

志ん 体が丈夫だったら師範学校も落ちずにもう先生になつとつたらうに。兄ちやはりゑさの体の弱さをまんまもらつたんだわ。

多蔵 ……。

志ん 兄ちやをわしが産んどつたら益まちやと同じくらい丈夫だったかもしれん。でも、こんな本を読まんかつたらうね。

多蔵 ……。

玄関の扉が開き、正八が入ってくる。

正八が入ってくると、志んはムスツと不貞腐れた表情をつくる。

正八 なにー二人して。店で待つとればええだて。

志ん なにー偉そうに。あんまり帰つてこんから離れで首でもくくつとるんだわと見に来たんだわ。

正八 誰が首をくくるんだて？

志ん 兄ちや以外に誰がおるかや。

正八 なんて俺が死なんとかん？

志ん もう働く先が見つからん、体も無理できん、他にしようがないが。兄ちやが死んだらわしらも心中だわ。近所に不吉な噂がたつて畳も下駄も売れんようになる。残された益ちやが哀れだて。

正八 は？

志ん そんな顔を見たらひと目で分かったわ。

正八 何がー？

志ん 何がー？ 分かつとるくせに、強がりおって。

多蔵 お前、少し黙つたらんか。

志ん 黙っておれるきゃあ。ほんとに運がないね。運は子供の時分に『赤い鳥』なぞいう雑

誌に童話のつたりして使ってたんや。『赤い鳥』だけじゃなく、

多蔵 どうなった、教員の口は？

正八 決まった。

多蔵・志ん ー。

正八 やつと県の方と話がついたそうだわ。佐治先生がそう仰られた。

多蔵 本当か？

正八 ああ。

志ん 嘘じゃないかや？

正八 なんて嘘をつかにやいかん。

多蔵は自分でも気がつかないうちに、小踊りを始めてしまう。

と、同時に、庭の方からちゑがこつそりと現れ、部屋の中がかるうじて見える程に、音を立てないように、わずかに縁側の戸を開ける。

ちゑは雑誌『赤い鳥』と靴と花のようなものを持っている。

志ん ……そうか、決まったか……。

正八 来月から女学校の先生だわ。

志ん ……うん、うん、女学校の先生だ。立派立派。これで近所を大手を振って歩けるわ。

(多蔵を見る) 何しとるの？

多蔵 ん？

多蔵は自分の小踊りに気がつくをやめる。

ちゑは部屋の中の様子を窺っている。

多蔵 体が勝手に踊つとった。

志ん ふざけた踊りだな。

多蔵 ……。

志ん 佐治先生と遠藤先生のところへ改めて御礼にいかないかんなあ。ずっと見放さずに

目をかけてくださった、一生頭が上がりかね。ありがたいことだわ。

正八 ……。

志ん そしたら、ちよつとしたら店にこやーよ。

正八 ああ。

志ん ……こんな嬉しい日はないなあ……父ちゃ。

多蔵 (また小踊りをしてしまいそうだったが取り戻して) おう。

志ん多蔵は玄関から出て行く。  
ちゑは志ん多蔵が出て行ったのを確認すると、縁側の戸をゆっくりと開ける。

ちゑ 正八っあん。

正八 (ちゑに気がついて) おう。

ちゑ おじさんとおばさんは？

正八 店に戻った。

ちゑ ふー、あー、驚いた。なんでおじさんとおばさんが来るのよ？

正八 知らん。勝手に待ち構えとった。

ちゑ 玄関の戸が開いたらおじさんとおばさんでしょう、私、縁側から慌てて飛び出して

いったんだから、靴を持って、裸足で。ほら、足の裏がこんなに汚れちゃって。

正八 ……。

ちゑ 正八っあん、早く拭くものよこしてよ。

正八は部屋のどこから雑巾を探し出してきて、ちゑに渡す。

ちゑは縁側に腰かけ、足を拭き始める。

正八 一緒に待つとれば良かっただろ。

ちゑ 嫌よ。おじさんは無愛想だし、おばさんは最近妙に馴れ馴れしくしてくるし。

正八 ……。

ちゑ はい、これ。

ちゑは明らかに踏まれたせいでペチャンコになった花を正八に差し出す。

正八 ……。

ちゑ 本のしおりにするでしょう？

正八 するわけないだろ。

ちゑ ダメよ、この花、無駄死にじゃないの。

正八 お前が踏んづけたんだろ。

ちゑ 踏んづけたのは私だけど、果たして私が悪いのかしらねえ。

正八 俺のせいとでも言いたげだな。

ちゑ おじさんとおばさんが突然現れなければ、この花を私が踏んづけることもなかった

し、おじさんとおばさんがいてもたってもいられないほどの心配をさせたのは正八っあんの不甲斐ない人生なわけだし。

正八 ……。

ちゑ だから、はい。あと雑巾も。

正八はちゑからペチャンコになった花と雑巾を受け取る。雑巾は土間の辺りに放るが、花はどうすればいいか分からず持ったままにいる。

正八 ……  
ちゑ それで？ 決まったんでしょ？  
正八 ああ。  
ちゑ 安城高女の先生か。  
正八 ……  
ちゑ 職人の息子が先生か。時代も変わったねえ。  
正八 馬鹿。  
ちゑ あら、中山のお殿様の末裔に向かって馬鹿だなんて、昔だったら市中引き回しの  
上、打ち首獄門よ。  
正八 (苦笑)  
ちゑ 嬉しそうね。  
正八 そう見えるかや。  
ちゑ 今が一番幸福よね。希望に胸を膨らませ、その先の辛い面倒くさい現実生活にはま  
だ遭遇してないんだから。  
正八 (ちゑが持っている『赤い鳥』を指して) 古い物を読みやがって。  
ちゑ ん、ああ。久々に読んだけど傑作じゃないの、『ごんぎつね』。  
正八 ……  
ちゑ あの時のこと、覚えてるわ。出版社から送られてきたこれを封も開けずにうちに持  
ってきて。  
正八 そうだったか。  
ちゑ 正八っあん、俺の作品が載っとるって珍しく息を切らせて。  
正八 ……  
ちゑ 私もうちのお母さんも何事と驚いて、それで三人で一緒に読み進めていってね、で  
も、読み進めていくうちに正八っあん、段々不機嫌になって、これは俺の作品やない、  
鈴木三重吉先生の手直しが所々に入っとるって、終いにはプイと不貞腐れてしまっ  
てね。  
正八 ……  
ちゑ お母さんが、多少の手直しなんてなんですか、『ごんぎつね』は紛れもなくあなた  
の作品です、掲載してくれただけでも感謝しなければいけませんよって言ってね、大丈  
夫、あなたには文学の才能があります、中山家の太鼓判を押しますって付け加えたら途  
端に機嫌が悪くなつて。  
正八 ……  
ちゑ 正八っあんはうちのお母さんが好きだったねえ。  
正八 ……  
ちゑ うちのお母さんも正八っあんのこと、最期まで気にかけていたし。  
正八 ……  
ちゑ 誰にでも平等に優しくて、聖母みたいな人だった。  
正八 ……  
ちゑ どうして私にあの穏やかさが受け継がれなかったのだろう。

正八 ……。

ちゑ これ、いつ書いたものなんだっけ？

正八 ……確か十八の頃だわ。

ちゑ そんな若くして物事の本質をねえ。

正八 ……。

ちゑ ごんはまさか兵十に撃たれるなんて思ってもみなかったんだろうね。

正八 ……。

ちゑ でも、いつまでごんは兵十に山の幸を運び続けるつもりだったんだろう。

正八 ……。

ちゑ 今日もいつものように久ちゃんに言づけて私を呼び出したでしょ、そしたらねあのガキ、誰に吹き込まれたかは知らないけど、なあなあ、今日も正八つあんと真つ裸で遊ぶきやあ？ って言ってきたから頭はたいてやったわよ。まったく近所じゃあそういうことになつてるのね。

正八 ……。

ちゑ 正八とちゑは懇ろの仲だとも聞いたことがある。

正八 ……。

ちゑ それを正八つあんのおばさんが言いふらしていると聞いたこともある。

正八 ……。

ちゑ 果たして真相は？

正八 ……。

ちゑ 当の本人達にすら分かっていない。

正八 ……。

ちゑ 中山のお殿様の娘が畳職人の家に嫁いだりするかしらねえ。

正八 ……。

ちゑ お母さんの生前に冗談で正八つあんと結婚を仄めかしたら、珍しく厳しい口調で「いけません」って言われたなあ。

正八 ……。

ちゑ と言いつつも、中山家は没落気味、父も母も死んでしまつて、士族だった誇りもどこへやら……でも、中山家は私がきつと再興させてみせるんだから。そのためにはいつでも産婦人科でくすぶつてるわけにはいかない。うん、私は外科がやりたい。外科がやりたいのよね。

正八 ……。

ちゑ よしっ、やめよう、やめてしまおう、うん、よし、今から辞めるって伝えにいく。正八つあん、私、早速、行ってくるっ。

ちゑは勢いよく出て行くこうとする。

正八 ちいこ。

ちゑ なによ？

正八 あの葉、ここに置いてある。



正八は本棚に行き、本と本の間から紙袋を見せる。

ちゑ ……。

正八 文夫から取り上げられただろ？

ちゑ かわいい弟が私のためを思ってたね。

正八 文夫が東京に行くからと俺に預けにきよった。

ちゑ 馬鹿ね、文ちゃんはこういうところがぬけてるのよね。文ちゃんだけじゃなくって、中山家の男はお父さんも兄さんもほんとにぬけてる。まったくもうどうして正八っあんに預けたりするのかしら。

正八 持つていくかや？

ちゑ ……ううん、今日は大丈夫よ、落ち着いているから……。

正八は菓をしまおうとする。

ちゑ でも、せつかくだから一錠もらっておくわ。

正八は菓を一錠取り出し、ちゑに渡す。

ちゑ (受け取って) 正八っあんは飲んじや駄目よ。精神安定剤って依存性があるから、正八っあんみたいなのは特にね。医者が言うんだから間違いないわ。

正八 ……。

ちゑ 今日は良かったじゃないの。正八っあん、きっと人気が出るわよ。女学校なんて若いってだけで男の先生はもてはやされるんだから。

ちゑは再び出て行こうとする。

正八 ちいこ。

ちゑ もう何よ？

正八 俺とお前は特別だわ。

ちゑ ……。

正八 お前のことは俺にしか分からんげな。

ちゑ ……。

正八 ……。

ちゑ ……私、時折思うのよ。息をね、正八っあんの息をさ、思い切り吸い込んでもいいかなって。

正八 ……。

ちゑ それ、いつまで持つてるのよ。

正八 ん？ (ペチャンコの花に気づいて) ああ。

ちゑは正八からそのペチャンコの花を取る。

ちゑ アネモネね、きつと、このお花。

正八 ……。

ちゑは正八に花を返す。

ちゑ さらにばじゃ。

ちゑは縁側から庭を通って出て行く。  
暗転。

②

一九三九年三月。夜。

上手の部屋には正八がいて、机で書きものをしている。

畑中は本棚の前に立ち、本を手にとっては戻したりしている。

畑中 俺もすっかり文学を読まなくなってしまったなあ。

正八 ……。

畑中 新美は相変わらずだな。今、文学の話をしたら容易に論破されてしまうがや。

正八 ……。

畑中はある本を手に取り、ページをめくる。

畑中 『アンナ・カレーニナ』かあ。

正八 ……。

畑中 お前に薦められて読んだなあ、えらい時間のかかったけどなあ。

正八 ……。

畑中 こんな場面があっただろう。ある男と女は共に愛し合っているけどもまだ互いにその気持ち伝えておらん。彼らの友人達は誰もが二人が一緒になるのは時間の問題だと確信しとって、当の本人達もそう思つとる。そいである日、二人は森へ出かけ、遂に結ばれるというその時に、女は自分でも分らずキノコのことを話し出してしまふ。男もなぜか女の話に合わせ、キノコのことを話し続けてしまふ。男も女も何かがおかしいことに気づいておるのにどうしようもできずに、結局、二人の恋愛は成就されることなく終わってしまふ。二人は愛し合っていたのにだぞ？

正八 ……。

畑中 お前が絶賛していた場面だ。学生の頃は、俺はまったく理解できんかったでなあ、気に入らんかった。でも、今は分かるなあ。

正八 ……。

畑中 国語と英語と作文だったな、担当は。

正八 おう。  
畑中 手厳しそうだな、お前の指導は。  
正八 そう見えるかや？  
畑中 淡々と冷淡に辛辣な言葉を浴びせとるんだろ。  
正八 ほんなことは時折だ。余程の時だわ。  
畑中 何が一番気に入らん？  
正八 礼儀が悪いのはやはり気に入らんなあ。挨拶がなおざりになつとる生徒には厳しく言つて聞かせる。  
畑中 お前が礼儀をか？  
正八 おかしいか？  
畑中 いつか注意しただろ、お前はお世話になつた人のことを呼び捨てにしとる。お前の童話をあんなに高く評価してくださっている巽先生を「巽」「巽」と呼び捨てにして。  
正八 あの人には先生と呼ぶほどの人ではない。  
畑中 せめて「巽さん」だろ。  
正八 本人に「巽」とは呼ばん。  
畑中 当たり前だわ。  
正八 そんなら、問題ないだろ。  
畑中 お前が生徒に「新美」「新美」と呼び捨てにされとつてもどうも思わんのか。  
正八 言われとるだろう。  
畑中 時折、佐治先生のこと「佐治」「佐治」と呼び捨てにするからなあ。人を上から見るところはほんとに直らんなあ。  
正八 ……。

玄関の扉が開いてちゑが現れる。

ちゑ ごめんくださいーい。  
畑中 おつ、ちいちゃんか。  
ちゑ あら、俊さん。  
畑中 戻つてきとるんかや？  
ちゑ そうよ。明後日には戻るけど。  
畑中 そうか。  
ちゑ 俊さんは変わりなく？  
畑中 ああ、変わらず知多木綿に勤めとる。  
ちゑ そう。  
正八 ちいこ。  
ちゑ なによ？  
正八 なんで玄関から入るんだ？  
ちゑ 玄関から入るのが普通でしょう。  
正八 お前は縁側からだろ。  
ちゑ そんなこと決まっていないでしょ。

正八 「ごめんくださいーい」じゃねえて。  
ちゑ なによもう。

畑中 どうしたのー？

ちゑ 正八っあんはね、不貞腐れてるのよ。ほら、私が去年の夏から大阪の病院へ行っ  
まっただから。時々は家の様子を見て帰ってきてるんだけどね、そのついでに正八っ  
あんのところに顔出すときまっって不機嫌なのよね。それがずっと。

正八 ……。

畑中 でも、ちいちゃん、大阪に行ったのは間違いだと思っってるんだろ？

ちゑ ううん、大阪に行っって本当に良かったと思ってる。どうして？

畑中 あれ、新美の話とちやうなあ。

ちゑ え？

畑中 ちいちゃんは勢いで大阪行きを決めてしまったことをこの一年、ずっと後悔し続け  
とっって、新美に大阪の学校へ移るように懇願してくるとか、なあ、新美。

正八 ……。

畑中 あれ、新美？

正八 ……。

ちゑは大きく笑う。正八は机から縁側に移動し、二人に背を向けるように腰かけ、  
書きものの続きをそこでやる。ちゑはなかなか笑いが収まらない。

畑中 ……。

ちゑ (笑いを抑えながら) 俊さん、それ本当？

畑中 ああ、二度も三度も聞かされたで、あいつには珍しく。ん、新美、嘘ついとるんか？

ちゑ (まだ笑っている) いやいや、俊さん、正八っあんの言う通り。

正八 ……。

漸く、ちゑは笑いが収まる。

ちゑ はー、笑い過ぎて苦しい。

畑中 ちいちゃん、外科は順調かや？

ちゑ もうちよつとで開業できそうなの。

畑中 開業？

ちゑ ええ、そう、開業よ。

畑中 それはどえらい出世だなあ。

ちゑ 大阪の患者さんにね、私に開業資金を出してもいいって言ってくれる人がいてね、そ  
れに勤め先の石神病院の院長も協力してくれそうなのよ。

畑中 そうか、岩滑も病院は丹羽先生とこだけしかないからなあ、きつとちいちゃんここ  
は流行るだろうな。

ちゑ ううん、開業は大阪の天王寺です。それが資金を出してくれる条件でもあるし、そ  
れにここで開業するつもりはつゆもないの。

畑中 そうか、そりゃ残念だな。

ちゑ 中山家は岩滑では駄目なのよ、土地の神様に見離されたような、そんな気がする。  
畑中 土地の神様か、うちも見離されとる、じいさんも親父も事業を始めて一財産を築くんだけど、結局は倒産してしまうでなあ。あ、土地の神様どうのではなくて商売の才がないんだな。

ちゑ (微笑む)

畑中 俺にもないだろうなあ、商売の才。

ちゑ あ、そうそう、大問題。

畑中 どうした？

ちゑ 永劫回帰。

畑中 永劫回帰？

ちゑ 永劫回帰よ。

畑中 それはどえらい問題だな。

ちゑ そうでしょう。

畑中 久々に聞いたなあ、永劫回帰。

ちゑ 私、知らなかったの、永劫回帰。

畑中 普通は知らんだろ、永劫回帰。

ちゑ 現状報告をしに丹羽先生の病院を訪ねて、それで先生と話し込んでいたら、永劫回帰の話になって。

畑中 丹羽先生は博識だからなあ。

ちゑ 同じ人生が永遠に繰り返される。今こうして俊さんと正八つあんの家の離れで話をしていることはもう何度も何度も繰り返されていることかもしれない。私がこうして思っていることすらも何度も何度も繰り返されていることかもしれない。

畑中 途方もない、目が眩むような思想だわ。

ちゑ すべての出来事はもう決まってしまうている。変えることはできない。ならば、もはや受け入れるしかない。良いことも悪いことも受け入れて、今、この瞬間を生きていくしかない。丹羽先生が仰ったそのままを言ってみすけども。ニー……ニー……、

畑中 ニーチェだ。

ちゑ ニーチェ、ニーチェね。正八つあん、ニーチェどこにあるの？

正八 自分で探せ。

ちゑ 整理はされてるんけど、並べ方が適当なんだ正八つあんは。なんていう本？

畑中 確か『ツアラトウストラ』に書かれてあったと思うけどなあ。新美、『ツアラトウストラ』だったよな？

正八 ああ。

ちゑと畑中は本を探し始める。

ちゑ 正八つあん、見つからないよ。

正八 ……。

ちゑ 持ち主なんだから探しなさいよ。

正八 探しとるのはお前だろ。  
畑中 見つからんなあ。

正八 母屋にあるのかもしれない。

ちゑ 取ってきてよ。

正八 ……。

ちゑ さつきから何を書いているのよ。

と、ちゑは正八の背後から原稿を奪い取る。

正八 おい。

ちゑは原稿を口に出して読む。

ちゑ 『三月九日拂曉ふつせうに正覚寺の石川喜久枝さんが永眠されました。わたし達は喜久枝さんのお顔をよく覚えていない。何故なら昨年四月四日入学されてから僅か二週間ほど学校に出て来ただけだからである。だが喜久枝さんは病床で学校への憧憬ばかり口にされ、わたし達はお見舞いにかがったり、お手紙をさしあげたりして、喜久枝さんの全快をこひねがっていた。併しみんな甲斐がなかった。そして三月一五日わたし達は学校の霊舎に喜久枝さんの魂をお迎えしなければならぬことになったのである。かうして喜久枝さんの学校への思慕は実現されたが、これはまた何という悲しい形式だらう。だが私達は今は喜久枝さんの御魂の安らかに眠られんことを切に祈ってやまない。』(※2)

畑中 生徒が亡くなったそう、その逝去の報せを、学報で。

ちゑ ああ、そうなの、そうなんだ。

正八 ……。

ちゑ 死因は？

畑中 結核らしい。

ちゑ そう。

正八 ……。

ちゑ まだ若いのに残念ね。

畑中 結核はどうにもならんからなあ。

ちゑ まだ有効な治療法は見つかっていないけど、国家的課題として結核対策に政府は取り組んでる。今は予防を徹底的にやるしかない。

畑中 予防かあ。

ちゑ 衛生教育の徹底、体育運動の振興、健康診断の広範な実施、発病防止設備の充実、患者の隔離療養施設の設置、喀痰かくたんの処理の指導と徹底。そして、なによりも未感染者へのB

CG注射。都市だけじゃなくて田舎にも医療設備の充実をさせること、これは喫緊の課題。

東京や大阪などの都市に出稼ぎに行った人が工場なんかで誰かのをもらって発症して、田舎に帰ってくる。それで自宅療養で家族に感染してしまう。

畑中 ……。

ちゑ それにね、発症してもみんな隠すでしょう。

畑中 そりゃあ言えんわなあ。こんな田舎だったらあつという間に結核持ちだつて広まつてしまうげな。

正八 ……。

ちゑ ……。

正八 俺も噂をたてられとるかもしれん。

ちゑ ……。

畑中 確かに新美の容貌じゃあ疑われてもしやあないなあ。でも、違うやろう、新美は。

正八 ……。

畑中 まあ、文才のあるやつはたいがい早死にやからなあ。正岡子規しかり、樋口一葉しかり……なんぞ関係性があるんだろうか。

ちゑ そんなの偶然よ。

畑中 天は二物を与えずだ。世の中には一物も与えられん奴もおるのに、俺みたいになあ。

ちゑ でも、一物はあるじゃない。

畑中 ちいちゃんっ。

ちゑ あつた、あつた。

ちゑは本らしきものを手に取り、正八や畑中に見せないように背中を向ける。

畑中 あつたかや？

ちゑ うん、ここね。『寒い冬が北方から、狐の親子の棲んでゐるもりへもやつて来ました。

或朝洞穴から子供の狐が出ようとしましたが、「あつ。」と叫んで眼を抑へながら母さん狐のところへころげて来ました。「母ちゃん、眼に何か刺さつた、ぬいて頂戴早く早く。」と言ひました。母さん狐がびつくりして、あはてふためきながら、眼を抑へてゐる子供の手を恐る恐るとりのけて見ましたが、何も刺さつてはゐませんでした。母さん狐は洞穴の入口から外へ出て始めてわけが解りました。昨夜のうちに、眞白な雪がどつさり降つたのです。その雪の上からお陽さまがキラキラと照してゐたので、雪は眩しいほど反射してゐたのです。雪を知らなかつた子供の狐は、あまり強い反射をうけたので、眼に何か刺さつたと思つたのでした。』(※3)

畑中 それはニーチェかや？

ちゑ ううん、ニーミ。

畑中 (苦笑)

ちゑ ニーチェは見つかからない、縁がないんだな私には。

畑中 新美の創作した童話を初めて聞いたわ。

ちゑ あら、そう。

畑中 新美は小説を書きたいんだと思つとつたで。

ちゑ 駄目よ、正八つあんの小説、向いてない。小説だと正八つあんの陰気なところが全面に出てしまうもの。正八つあんは童話よ童話。児童文学を書くのがいいの。

畑中 童話かあ。

ちゑ 何よ？

畑中 童話ねえ。

ちゑ 小説と童話に差なんてない、同じ文学じゃないの。

畑中 童話は牧歌的というかな、人間の心理はもつと複雑だと思うし。それに子供のために書かれとるものだろう。

ちゑ 俊さんも馬鹿ね。大人相手とか子供相手とか関係ない。

畑中 でも、ドストエフスキーを子供が理解できるかや？

ちゑ できるわよ、理解というか感銘する箇所が違うだけで。

畑中 そうかや。本質的なところは分らんのだろ。

ちゑ じゃあ、俊さんは理解できてるの？ ドストエフスキー。

畑中 それはなんとも難しいところだわ。

ちゑ あらあら。

畑中 でも、ドストエフスキーだぞ。

ちゑ ケケケケケケケケケケ。

畑中 意地の悪い笑い方だな。

ちゑ 俊さん、宮沢賢治はどうなんですか？

畑中 宮沢賢治は、おもしろい。

ちゑ 童話作家だと思っただけでもない。

畑中 あ、……賢治は……その……格が違うからのお。

ちゑ ケケケケケケケケケケ。

畑中 ……。

ちゑ 正八つあんの書いたもの、本当に読んだことがないの？

畑中 新美とは文学の話をよくしとったから、新美の書いたものを読んだような気になっ  
とった。

ちゑ 私、いいと思うのよ、正八つあんの童話。北の賢治、南の南吉よ。

畑中 童話の世界ではそんな風に言われとるんか？

ちゑ 私が勝手に言ってるだけよ。それに詩が好きよ、特に春をうたった詩が。

畑中 新美、熱烈な支持者がおるぞ。

正八 宮沢賢治と比べられてもかなわんぞ。

畑中 新聞にも掲載させてもらおうしなあ。

ちゑ 新聞に？ どの新聞？

畑中 哈爾濱はるびん日日新聞だったか。新美の東京の友達がその新聞の学芸部に就職したらしく

て、新美の書いたものを載せてくれるそうだわ。

ちゑ 外地の新聞か、でも、外地でも新聞に載るとは大したものね。

正八 ……。

ちゑ 俊さん、これ、正八つあんの創作ノート。



ちゑは持っていたノートを畑中に渡そうとするが、正八は縁側を離れ、創作ノートをちゑから奪う。

ちゑ なによ。

正八 見せんでええわ。

ちゑ 私には書いたそばから見せてたくせに。

正八 ええわ、畑中に詩は分らん。

畑中 ああ、そうだ、俺は抽象的な物言いが好かんからな。

正八はノートを棚にしまう。

畑中 そんなで、安城にはいつ越すの？

ちゑ 正八っあん、安城に行くの？

正八 会議で職員はなるべく学校の近くに下宿するようになったんだわ。

畑中 安城に行つたきりか？

正八 基本的にはそうだ。でも、春休みのような長い休みには戻ってくる。

そこへ、玄関の戸が開いて文夫が現れる。

文夫 姉ちゃん。

ちゑ どうしたの？

文夫 どこで聞きつけたんか、姉ちゃんが大阪から戻ってきたのを知ったばあさん共が家に訪ねて来て、姉ちゃんに診てほしいとうるさいんだわ。

ちゑ またかあ、こっちへ帰ってくる度に来るなあ、もう日も暮れてるのに。

畑中 ちいちゃんの人徳だわ。

文夫 姉ちゃんが無料ただで診てやるから。

ちゑ 俊さん、手伝つてよ。

畑中 (苦笑して) 俺に何ができるの？

ちゑ 話を聞いてあげればいいのよ、大抵は大したことないんだから。

畑中 ばあさんの話なぞ聞きたくない。

ちゑ 古い先短いんだから聞いてやってよ。

文夫 姉ちゃん、早う。

ちゑ 分かった、先に俊さん連れて戻つてて。

文夫 俊さん、頼むよ。

畑中 え、俺、ほんとに行くんきやあ？

文夫 まずはばあさん共の交通整理だ、あいつら順番に並ぶことを知らんから。

畑中 厄介だなあ。まあ、仕方ない。新美、また来るぞ。

正八 おう。

文夫 正八っあんもぼちぼち入営か？  
正八 ……。

文夫と畑中は玄関から出て行く。

ちゑ まったく意地が悪いなあ、文ちゃんは。

正八 ……。

ちゑ 正八っあんは徴兵されないの、知ってて。

正八 あんな馬鹿は相手にしん。

ちゑ 正八っあん。

正八 徴兵検査は甲、乙、丙、の丙。俺は丙の字の丙隊さんだ。

ちゑ あら、珍しく自虐的。

正八 畑中也疑つとるんだろな、本当のところ。

ちゑ 結核のこと？

正八 おう。

ちゑ 当たり前でしょ、疑わない人の方が少ないくらいよ。

正八 お前は？

ちゑ 私？

正八 愚問かや。

ちゑ そうよ、当然、愚問よ。我が家では亡き母の指導をまだ守り、正八っあんの使った湯呑みは消毒、座布団は日干しにしております。

正八 (苦笑)

ちゑ 体調は悪くないでしょ？ 私が送った薬も飲んでいるでしょ？

正八 ああ。

ちゑは本棚から紙袋を取り出して、薬を取り出す。

ちゑ そろそろ薬を補充しておかないと。文ちゃんに見つからないように。

正八 大阪におるんだから見つからんだろ。

ちゑ 馬鹿ね。こつちに戻った時はどこへ置いておけているのよ。

正八 ……。

ちゑ この一年はほとんど会わなかったわね。

正八 ……。

ちゑ でも、何も変わってない。変わらないみたいね、私も正八っあんも。

正八 ……。

ちゑ 私が手を握れば正八っあんが離して、正八っあんが手を握ってくれば私が離してっという感じで。

ちゑは正八の手を取る。

正八 ……  
ちゑ きれいな指、細くて長くて。

正八 ……

ちゑ 私と一緒にになりたい？

正八 ……

ちゑ 息をさ、正八つあんの息をね、思い切り吸い込んでもいいかなって、私、何度も言ったわよね。正八つあん、これを言われるときまって困った顔をする、今もそう。

正八 ……

ちゑ やっぱり、私は、嫌よ。

正八 ……

ちゑは正八の手を離す。

ちゑ 今は恋愛なんて考えられない。きちんと開業して、中山の家を再興させてみせます

よ、新美先生。

正八 ……身勝手だな、お前は。

ちゑ 知ってるわ。でも、正八つあんだって。

正八 ……

ちゑ 正八つあんもそうじゃない。

正八 ……

暗転。

③

一九四〇年三月。昼。

安城高女の制服を着た生徒、山本初枝が庭から離れの中を窺っている。

初枝 ……

初枝は縁側の戸を思い切って開けようとするが、思い留まる。離れの中に誰もいないようなので諦めて引き返そうとするが、また思い留まってその場にいる。

初枝は靴から台本を取り出そうとして、出さずにしまう。しかし、再び台本を取り出して、読み始める。

初枝 『…それがとつてもひどいのよ。こないだも猫さんとこへ郵便をとどけに来て途端にお屁したんですって。猫さんは眼がくらんでしまつてあと半日頭痛がしたつていうのよ』(※4)

初枝はその箇所を、言い方を変えながら何度も繰り返す。  
さらに、

初枝 ガアガア、ガアガア、ガアガア、ガアガア。

と、「ガアガア」の練習をし始め、「ガアガア」と言いながら、次第に鳥のような格好になっていく。  
そこへ、多蔵が玄関から入ってくる。多蔵は正八を呼びに来たのだが、外から「ガアガア」という声がするのを聞き、縁側の引き戸を開ける。初枝は多蔵に気がつかず、「ガアガア」の練習はさらに熱を帯びていく。  
そして漸く、

初枝 ー。

初枝は多蔵に気がつく。

多蔵 ……。

初枝 ……。

多蔵 蛙か？

初枝 鶯鳥です。

多蔵 ……。

初枝 ……。

多蔵 金はやらんぞ。

初枝 物乞いじゃないです。

多蔵 何だあ？

初枝 ……新美先生は？

多蔵 ……知らん。

初枝 ……。

多蔵 正八の生徒か？

初枝 はい。

多蔵 ……。

初枝 ……。

多蔵 益吉が戻ってきよったわ、まったく。

初枝 え？

多蔵 あんなに盛大に送り出してやったのに……。

初枝 ……。

多蔵 近所のやつらがどんな目で見てくるか。

初枝 ……あもう、新美先生の、

多蔵は初枝が話しかけたところで振り返り、玄関から出て行ってしまふ。

初枝 ……。

そこへ、正八が庭の方から現れる。

正八は本を数冊抱え、また花びらの欠けた花を一輪持っている。

正八 ……山本か？

初枝 あ。

正八 こんなところで何しとる？

初枝 ……。

正八 ……。

初枝 ……。

正八 どうしたんだ？

初枝 ……先生。私、えらい心配なことがあつて、安城の、先生が下宿されている大見さん家の長屋を訪ねたんです。でも、日曜日の今日、先生は岩滑のご実家に戻られたとうかがつて、どうしても先生にお話したいことがあつて、そいでここにおるんです……。

正八 ……とりあえず上がるかや。

正八は部屋に初枝を入れる。

正八 よう家が分かつたなあ。

初枝 先生と同郷のとみちゃんのお家に遊びにきたことがあつて、そんな時に教えてもらったんです、お店の方とこの離れの方と。

正八 ああ、山本はとみと仲がええのかあ。店も訪ねたかや？

初枝 いえ、とみちゃんに先生はここに住んどると聞いたとつたから。

正八 よくここでとみに勉強を教えてやったんだ。あいつが安城高女に入れたんは僕のおかげだ。だのに、あいつはなんのお礼も言わんで、当然みたいな態度をしておつてなあ……  
おお、すまん。そいで、どうしたんだ？

初枝 ……私、お母さんの役、できないです。

正八 できないというのとはどんな理由だ？

初枝 私には難しすぎます。

正八 あんなに自信をもつて演じとるのに？

初枝 自信なんて微塵もないです。

正八 みんな、まだ恥ずかしさが残つとる中で、お前だけは落ち着いとつて、声も良い。昨日、見学に来た校長先生もお前のことを褒めとつたぞ。

初枝 でも、私、お母さんに見えんでしょう？ こんなに小さくて痩せ細つとるお母さんなんておらんですよ。私の二倍もぶつくらしとる松代ちゃんと私の二倍も背のある日出ちゃん私の娘役というのは、やはりおかしいと思うんです。

正八 意外性を狙つた僕の配役だ。絶妙ですと近藤先生も言つてくれてなあ。

初枝 そんなに私、鶯鳥に見えますか？

正八 それは劇の嘘というもんだ。

初枝 とにかく私はお母さんの役はやれません。  
正八 でも、予餞会は来週だしなあ、今更なあ。  
初枝 澄子ちゃんが適役だと思います。  
正八 武谷はいかん。あいつは絶対にいかん。最初に読み合わせた時の武谷のひどさはお前も知っとるだろ。  
初枝 でも、先生の書かれた童話の清書を頼まれるのはきまって澄子ちゃんだし、作文が読まれるのもいつも澄子ちゃんだし、英語のリーディングだって毎回澄子ちゃんにあててるし。  
正八 ……。  
初枝 ……。  
正八 ……もしかや武谷になんか言われたんか？  
初枝 ……。  
正八 ……何も言われてません。  
初枝 言われたんだな。  
正八 何も言われてません。  
初枝 言われたんだな。  
初枝 澄子ちゃんは、自分がクラスで一番お母さんに見えるとは言っていました。  
正八 言われとる。  
初枝 澄子ちゃんは、お母さんの役、やりたいとは言っていました。  
正八 言われとるなあ。  
初枝 澄子ちゃんは、自分がやった方がええと思うとは言っていました。  
正八 はつきり言われとるなあ。  
初枝 澄子ちゃんは、自分がクラスで一番鷺鳥に似てるとは言っていました。  
正八 そんなこと自慢するか。  
初枝 ……。  
正八 武谷を調子にのせてしまったかあ、そんな奴とは思わんかったなあ。  
初枝 ……。  
正八 ……。  
初枝 ……。  
正八 ……。  
初枝 ……。  
正八 ……。  
初枝 ……。  
正八 ……。  
初枝 ……。  
正八 ……職員室では話題になっとるのに。  
初枝 ……。  
正八 ……。

初枝 ……ガアガア。

正八 ……？

初枝 ガアガア、ガアガア。

正八 きゅ、急にどうした？

初枝 蛙じゃないです。

正八 え？

初枝 蛙じゃないです。

正八 ……鶯鳥だろ。

初枝 そうです、鶯鳥です。さつき練習しとつたら「蛙か？」と言われて。きつと先生のお父様だと思えますけど。

正八 親父に会ったんか？

初枝 なんとか吉さんが戻ってきたとか。

正八 おお、そうか、なんかあったんかな……。

初枝 どうかされたんですか？

正八 先週、大阪の連隊に送り出した弟がどうやら戻ってきてしまったみたいだな。

初枝 大丈夫ですか？

正八 うん。ちよつと待つとつてくれるかや、すぐ戻ってくる。その間にもう一度考え直してみてくれ。

正八は出て行こうとするが、

初枝 あの、先生。さつきからずつと手に持つとるんは花ですか？

正八 ん、ああ、ほんとだ、ずつと持つとつた。

初枝 かわいそうに花びらが欠けとる。

正八 何の花か分からん。

初枝 青い花……。

正八 これも頼む。

正八は初枝に花を渡す。

正八 山本、武谷のことは心配せんでええから。

正八は縁側から出て行く。

初枝 ……。

初枝は正八の部屋を眺める。

初枝 ……本だらけだ。

そこへ、玄関の戸が開いて、

文夫 正八つあんっ、あがるぞっ。

と、文夫が息を切らせて入ってくる。

文夫 姉ちゃん来とるだろ。

初枝 ……。

文夫 あれ、あ、どうも。

初枝 こんにちは。

文夫 正八つあんの生徒さん？

初枝 はい、新美先生に教えてもらっとります。

文夫 (苦笑して) 新美先生……。

文夫は腰を下ろす。

文夫 ふー。

初枝 ……。

文夫 正八つあん、いや、新美先生のこと好きかや？

初枝 え？

文夫 俺は好かん。東京外語出とるからって、学のないもん、いや、この土地のもんを見下しとる。職人の倅のくせに。

初枝 ああ、先生はそんなところあります。

文夫 だろ。

初枝 学校でも勉強できる子ばかり鼻屑にして、本なんか貸してあげたりしとる。できん子には厳しくあたって。

文夫 だろだろ。

初枝 字のきれいな子に童話の清書をしてもらうからと当番じゃない子に掃除をするように言いつけてきたり。

文夫 自慢したいんだろうなあ。

初枝 自慢とかそんな雰囲気は微塵も感じさせんのです。僕は童話作家だから君達も了承してくれたまえよと、当然という態度で。

文夫 スカしおって、外地の新聞に掲載されるだけなのに。

初枝 でも、体を使うことはまったく駄目。農作の時なんぞ、私らに臭くて重い肥桶を持たせて、先生は何も持たんと後ろからついてくるだけで。

文夫 畳屋の息子のくせに畳一枚、持つことができんからもう。

初枝 歩き方も変、後ろから見ると斜めに傾いとる。

文夫 昔からそうだ、駆けていく姿なんか見とれん。

初枝 ああ、先生の走り方！ 私も初めて見た時は仰天しました。腿とひざがえらいことになっとなって。



文夫 (笑う)  
初枝 そいでほんの数歩駆けただけなのに火事場から逃げてきたかのように息を切らせて  
ってなんですかあなたさつきからっ！  
文夫 ……え。  
初枝 そんなに先生のこと悪く言わんでくださいっ。  
文夫 ……進んで悪口言ったのはあんただがね。  
初枝 先生はああ見えて生徒一人ひとりのことをよう見とるんです。こんなに目立たん私  
を、やりがいのある素晴らしい役に抜擢してくれて……。  
文夫 ……。  
初枝 澄子ちゃんは怖い、でも、私には先生がついてくれとる。  
文夫 ……何の話だ。  
初枝 ところで、ここにおられて大丈夫ですか？  
文夫 ん、なんでだ？  
初枝 先生、お店へ戻られましたけども。  
文夫 別段、先生に用はないんだ。  
初枝 先生は心配されとりました。  
文夫 俺のことをか？  
初枝 はい。  
文夫 なんであいつに心配されないかん。気色の悪い。  
初枝 入営されたけど戻ってこられたとか。  
文夫 俺の入営はこれからだ。もうじきだとは思うけどな。  
初枝 先生の弟さんじゃないんですか？  
文夫 どえらいこといな。  
初枝 あれえ、すっかりそうだと思ったりしました。  
文夫 俺は近所のもんだ。でも、そうなんか、益吉っちゃん戻ってきてしまったんか。  
初枝 ご病気なんでしょうか。  
文夫 益吉っちゃんは頑健だ、病気になったことなんて聞いたことのない。正八っあんとは  
まるで違う。  
初枝 兄弟なのに。  
文夫 まあ、母親が違うでなあ。  
初枝 お母様が違うんですか？  
文夫 正八っあんの実の母親はとっくに亡くなっとる、正八っあんがほんのまだ子供の頃  
になあ。聞いた話だけど、そんな人も体の弱い人で、正八っあんの前にもうひとり産んだん  
だけど、その子もすぐに亡くなってしまったそうだ。その母親の血筋というのが体の弱い  
人ばかりで、二人おった兄さんも若くして亡くなってしまったらしい。  
初枝 ……。  
文夫 正八っあんも長くは生きられんだろうなあ、きっと結核も持っとるだろうし。  
初枝 結核……。  
文夫 移されんように気をつけんと。

急に初枝の様子がおかしくなる。

初枝 ……私、結核持つとるかもしれませぬ。

文夫 な、何を言つとるの？

初枝 ……私はこんなに小ちやくてか細いですが、これまで大きな病気はおろか風邪をひいたこともありません。急な坂道を自転車で転げ落ちても全然平気だったんです。

文夫 それだったら、

初枝 でも、幼馴染の喜久ちゃんは私のせいで死んでしまったんです……私と一緒に遊んで勉強したせいで、喜久ちゃんは……せつかく安城高女に合格したのに何の思い出もつくることなく……死んでしまった……。喜久ちゃんが死んだんは結核で、私がきつと結核持ちだから私のがうつって……。

文夫 ……そんなただの偶然だろう。

初枝 偶然じゃないです。今も私の友達が……和ちゃんが、学校に来れんようになってお家で寝込んでります。和ちゃんのお家にはよく遊びに行かせてもらって……和ちゃんは絵が上手だったから先生方や同級生のことを面白おかしく描いてくれたんです。新美先生なんか肉付けのない一本線でサーッと描いて……でも、半年前から学校も休みがちになって、とうとう長期のお休みだと知らされて、お見舞いに行ったら、和ちゃんのお父さんに「結核だ」と告げられて、お前のせいだと言わんばかりに睨まれたんです。和ちゃんは今もう骨と皮のように寝<sup>やぶ</sup>れてしまったと聞いとります……。

文夫 ……。

初枝 ……でも、家の血筋はみんな長寿で、曾祖母ちゃんなんかは八十近いのにまだまだ健在で、鎌を振り回しとるんです。だから、私……。

文夫 ……そうかや。俺の姉ちゃんは医者でな、一度診てもらったらええ。

初枝 お医者さん！ 女なのに。

文夫 そうだ！ 姉ちゃんを探しとるんだった！

文夫は立ち上がると、

文夫 診てもらうの、今日は無理かもしれんけど……。

初枝 ……。

文夫 さつきからずつと何を持つとんの？

初枝 (気づいて) え、え、あ、これは、花です。

文夫 花かあ、片しか花びらのない、それでも花なのかな。

初枝 先生が拾ってきたんです。

文夫 何をしとるんだ……またな。

文夫は玄関から出て行く。

初枝 ……。

初枝は手に持った花を見て、花を活けるための器を探して部屋を見回す。一通り部屋を見回して、探している器がなかったらしく、縁側から庭に出る。そして、手で土を掘って、持っていた花を埋めると手を合わせる。

初枝 ……。

そこへ、ちゑが急ぎ足で庭から現れ、初枝にぶつかると倒れる。初枝は初枝に気がつかなかったのか、その勢いのまま部屋に入る。そして、本棚へ行くと、薬の入った紙袋を探すが、なかなか見つけない。ちゑはぞんざいに本を散らしていく。そこへ、玄関から志んが入ってくる。

志ん 生徒さん、待たせてしまつてすまんなあ。兄ちゃと益ちゃの話が終わらんで、生徒さんもお店の方にこやーよ。お茶でも召し上がつてよ。

ちゑは志んを気にせずに、さきほどよりも激しく本を散らかしながら紙袋を探す。

志ん ……。

ちゑはついに紙袋を見つけて、中身を調べるが何も入っていない。ちゑは紙袋をぐちゃぐちゃにして投げつけると、その方向に志んがいて、志んに当たる。

ちゑ あ。

志ん あ、じゃない。何をするの。

ちゑ ……。

志ん 中山のご子孫が空き巣かや？

ちゑ ……。

志ん どうしたんだ？

ちゑ ……。

志ん なにー、ぼーっと突っ立って。

ちゑ ……。

志ん なんも言われんのか？

ちゑ 正八っあんは？

志ん 店におるわ、益ちゃと話して。

ちゑ おばさん、正八っあんに私が待つてるって伝えてくれる？

志ん 自分で言いに行きやあ。

ちゑ いいじゃない、どうせ店に戻るんでしょ？

志ん なにー、その言い方。  
ちゑ いつもと同じよ。

志ん 気に食わん。

ちゑ 共通語が気に入らないの？

志ん それは前々から思つとつたことだわ。

ちゑ 同じ日本語じゃない。

志ん 中山の殿様が半田の言葉を使わんとはなあ。

ちゑ 使わないと問題でもあるの？

志ん 土地の神様に見離されるて。

ちゑ もう見離されてるわよ。

志ん そうだったな。

ちゑ そうよ、職人の、畳屋の、下駄屋の息子と懇ろの仲だつて噂を流されるくらいに見離されてる！

志ん は！

ちゑ 噂を流したのはおばさんでしょ、中山家の娘が正八つあんに嫁いだりしたら、こんなにどえらいことはねえからのう！ おじさんもおばさんも鼻が高くなるわな！

志ん 噂だと、噂だつたら中山さん、お前の噂は他にもいくらもあるで。大阪で色目を使つて患者から開業資金を集めとる、畑中の俊平と兄ちゃと二股をかけとる、丹羽先生とこの若い医者に熱を上げとる、

ちゑ ほうだよ！ ほの通りだわ！ 中山家の娘は夜毎男をとつかえひつかえ、不摂生を駆使して遊びほうけとる！

志ん 開き直りおつて。

ちゑ あー！ くだらん！ ほんとにくだらん！ こんな馬鹿げた噂を流すここの奴らがほんとにくだらん！ それを気にする自分もつとくだらん！ こんなばあと言い争つとる自分がまことに情けねえわ！

志ん ……。

ちゑ お願いだからさ、おばさん、正八つあんを呼んできてよ……呼んでくれなきや、私ここで小便たらしちゃう……。

志ん お前、気が違つたんか？

ちゑ ……おばさん、私は医者ですよ、医者のが違つていたら、治るもんも治らなくなりますよ、そうするとどうなりますか……病院の経営は悪化……私は首をきられて途方に暮れて……それから……なにもかも失つて……そう、なにもかも失つて……ああ、それはそれで楽なのかもしれない……なにもないのも楽なのかもしれない……。

志ん ……。

ちゑ ……でも、私にはそんな生き方できん……。

ちゑは泣いているようだ。

志ん ……。

ちゑ ……。

志ん ……こんなばあにそんな姿を見せるんか。  
ちゑ ……。

志ん ……もったいない。

ちゑ ……。

志ん ……。

ちゑ ……。

志ん ……あんたのお母さん、しゑさんはよう泣きよったなあ。他人の一喜一憂を自分のことのように目を濡らして……ほんとにええ人だった。

ちゑ ……。

志ん 医者ほど人の役に立つ仕事はないとあんたの進学を喜んでおられて。

ちゑ ……。

志ん 女が医者とは何事だと言いつつも、誇らしげだった、あんたのお父さんも。

ちゑ おばさん。

志ん ……。

ちゑ おばさん。

志ん ……なんだ。

ちゑ ……私、やってやりますから。

志ん ……。

志ん ……兄ちやを呼んでくるわい。

志んは玄関から出て行く。

ちゑ ……。

初枝 ……。

ちゑはずつとちゑを見つめていた初枝に気がつく。

ちゑ ……誰？

初枝 あ、

ちゑ ああ、制服を着て、もしや正八つあんの生徒さん？

初枝 ええ、そうです

ちゑ そう、そうなのね。

ちゑは本を片づけ始める。初枝も部屋へ戻ってきてきて手伝う。

ちゑ ……ありがとう。

ちゑと初枝は黙々と片づけている。

初枝 ……お姉さん、お医者さんなんですか？  
ちゑ まあね、このザマだけだ。  
初枝 ……私のこと、診てくれんですか？  
ちゑ ん、どうしたの？  
初枝 ……私、結核持ちでしょうか？  
ちゑ おお、突然、そんな。  
初枝 ……どうでしょう？  
ちゑ あんた、勇気あるわね。自分が結核かどうかなんて誰も知りたがらないのに。  
初枝 ……。  
ちゑ どうだろうねえ、ちゃんと検査してみないとなんともいえないけど、でもね、きっと  
違う。あんたは結核じゃない。  
初枝 でも、私、  
ちゑ うん、あんたは結核持っていない。診察しなくても分かるの、分かっちゃうの、私。  
見分ける才能があるのよ。病院でもね、ひと目見ただけでほとんど間違いなく当てる、当  
てちゃうのよね。  
初枝 ……。  
ちゑ 大丈夫よ、女の子なんてこれからふつくらしてくるんだから。  
初枝 ……。  
ちゑ ……大丈夫。  
初枝 ……。  
ちゑ 中山病院の院長先生が言ってるんだから間違いはない。  
初枝 ……。  
ちゑ (まだ片づかない本を見て) ふー、けっこう派手にやっちゃったなあ……もういいわ  
よ、片づけなくて。  
初枝 え？  
ちゑ いいのいいの、あとは正八つあんがやってくれるわよ。  
初枝 ……いいんですか？  
ちゑ うん。  
初枝 お姉さんはここに先生と住んでおられるんですか？  
ちゑ どえらいこといな。誰がこんなボロ家屋に住むかや。  
初枝 でも、お姉さんは先生の、  
ちゑ くさるにくさった縁ですよ、幼馴染ですよ、LOVERじゃないよ。  
初枝 らばー？  
ちゑ 正八つあんが恋人なんて、想像できる？  
初枝 え……先生と……恋仲に……でも、私には……私にぞっこの利美兄さんがおって……利  
美兄さんは村で一番の料理旅館の長男だけ……先生が……その気だったら……歳は充分  
離れとるけど……え……私……え……何を、何を言っとるんだらう……。  
ちゑ 今その気持ち若気の至りだったと大人になったら気づくでしょう。  
初枝 え、え、え、ああつ、私、そんなことより練習しんといかんです、あ、そうだ、お  
姉さん、先生が書いてくれた劇の練習をしたいんだけど、一緒にやってくれんですか？

ちゑ 劇を？ 正八っあんが書いたの？  
初枝 はい。  
ちゑ いいわよ、はりきってやるわよ。

初枝は台本を出してちゑに渡す。

ちゑ ガア子の卒業祝賀会。正八っあん、こんな物も書くんだ。

初枝 鷺鳥のお父さんの役をやってもらいたいんです。

ちゑ はいはい。ということは、あんたはお母さん役なのね？

初枝 はい。そうです。

ちゑ じゃあ、いくわよ。『鷺鳥の父役』えーつと、みんなで九人招待するんだつたけね。

猫の夫妻と牛の後家さん、これで三人。それから豚夫妻に鶏、これで六人。もうないかな

あ。』(※5)

初枝 『(鷺鳥の母役) 九人考え出して頂戴。それでないと困るんですから。九人分の御馳

走をこしらへてしまつたんですから。』(※6)

ちゑ あら、まあ、あんた上手じゃないの。私のお母さん、そんな感じだったもの。それに

比べて私のお父さん役つたらないわね。

初枝 そうですね。ちよつとひどいですね。

ちゑ あら、はっきり言ってくれちゃって。

初枝 いや、でも、ほんとにびっくりするくらい。

ちゑ そんなことないでしょ。

初枝 一人で練習した方がいいかもしれないです。

ちゑ そんなの私、まるで雑音じゃない。

初枝 ああ、雑音、そんな感じしました。

ちゑ えー、じゃあ、英語で言うわ。

初枝 英語？

ちゑ Well, are we going to invite 9 guests?

そこへ、正八が庭の方から現れる。

正八 おい。

初枝 あ、先生。

ちゑは台本を放って、裸足のまま庭に下りていき、正八に近づく。そして、正八の顔に自分の顔を近づける。

ちゑ 正八っあん、息を、吐いて。

正八 ……。

正八はちゑから顔を背ける。

ちゑ (苦笑して) 私、ほんとに身勝手だわあ……。  
正八 ……。  
ちゑ ごめん、正八っあん……。  
正八 ……。

暗転。

④

一九四一年三月。昼過ぎ。

正八が机で書きものをしている。

志んが玄関から入ってくる。

縁側の戸は開けられている。

志ん 兄ちゃ、どうなったの？

正八 (気がつかずに書きものを続ける)

志んは正八の机の近くに座る。

志ん 兄ちゃ。

正八 (気がついて) お、おう。

志ん 佐治先生の娘さんとの縁談はどうなったの？

正八 ああ。

志ん ああ、じゃ分かん。

正八 断られた。

志ん なんで？ 佐治先生が娘をやってもいいって仰ってくれたんだろ？

正八 そんなこと言った覚えはないと言った。

志ん ……お偉いさんはほんとに気まぐれだわ。

正八 ……。

志ん 一月に断られた縁談があったら、岩月さんこの。

正八 ああ。

志ん 今度は妹でなくて姉さんの方に頼んでみようと思つとるんだわ。

正八 無駄だわ、どうせ駄目に決まっとる。

志ん あたつてみんと分かんらる。

正八 妹の時、すぐに断られたのはなんで？

志ん 妹の歳が若すぎたんだ、岩月さんもそう言つとった。

正八 別の理由だわ。



志ん 別の理由でなにー？  
正八 (わざとらしく咳き込む)  
志ん おお、具合悪いんかや？  
正八 結核、結核。結核の真似だわ。  
志ん ああ、そういうことか、紛らわしい。  
正八 俺が結核持ちだと思っとる。  
志ん ……。  
正八 いつ死ぬかもわからん輩の家に誰が嫁ぎたいんだ。  
志ん ……体、調子悪いんか？  
正八 問題なしだ。  
志ん そうか……。

少しの間。

志ん 兄ちゃとちいちゃんが一緒になってくれればと思っとったで、小さい頃から仲が良かったし。  
正八 ただのくされ縁だ。  
志ん ……中山のちいちゃんが亡くなってから、もうすぐ一年かや。  
正八 あいつが死んだんは六月だ、あと三ヶ月もある。  
志ん 夏の、暑くなる前のことだったか。  
正八 ……。  
志ん まさかあんなに気性の強い娘が自殺するとはのう……。  
正八 ……。  
志ん 士族出身の家柄は、わしら貧乏人には分からん気苦労があつたんだな、天王寺で病院の開業までしといてなあ。自殺だから生命保険のお金がもらえんかったらしい。  
正八 ……。  
志ん 中山さんとはこのまま没落していくんかのう、東京へ行った文夫はどうするつもりなんだ。大学もすぐに辞めてしまったそうだしなあ。  
正八 あいつには期待できん。  
志ん ちいちゃんの出来が良すぎたからのう。ほんとにもったいない。  
正八 ……。  
志ん ……。

多蔵が玄関から入ってくる。

多蔵 おい。  
志ん なんだ？  
多蔵 電報がきた。益吉が名古屋の勤め先から明日、帰ってくるそうだがわ。  
志ん ……いよいよ入営か。  
正八 満州か。

多蔵 そうだ、満州だ。  
志ん ……。

多蔵 去年は入営してもすぐに戻ってきよったからのう、レントゲンで影が見つかったとかで。まあ、大したことにはならなかった。今年は平気だろう。

志ん 父ちゃ、戦争はいつ終わるんだ？

多蔵 じきに終わるだろ。

志ん じきっていつだあ？

多蔵 そんなこと分からずかあ。

志ん 適当なこと言いおって。

多蔵 ……。

志ん 近藤さんとこの末吉が戦争に行つて寔れて病氣になつて戻つてきたんだ。末吉が店に来てなあ、馬鹿みたいに陽気だった奴がすっかりしよげかえとつてのう。下駄を一足持つたまま、上官への恨みつらみとか、えらい寒さの中を上着一枚で過ごしたとか何べんも独り言ちてのう。

正八 それで戦争の現実だろうに。滅私奉公、忠君愛国なんてことは実際の現場では息を潜めてしまうげな。

多蔵 お前、なんてことを言うんだ。

正八 大丈夫、分かるとる、ここだけの話だ。銃後における人間の勝手な想像だ。

多蔵 不謹慎なやつだ。

志ん 益ちやもあんなにしよげかえつてまうんかや……。

正八 ……。

多蔵 ……。

志ん 益ちやはほんとに素直なええ子だからのう。

正八 ……。

志ん 兄ちゃ。弾よけの方法つちゆう本はないんかや？

正八 ないなあ、残念ながら。

多蔵 それこそ、滅私奉公、忠君愛国の精神だ。正八、お前、ほんとにふざけたことをぬかすな。

正八 分かるとる。

志ん さあて、益ちやに色々こさえてやらんとなあ。

志んは玄関から出て行く。

正八は書きものを再開する。

多蔵は部屋を見回す。

多蔵 本は増えても稼ぎは増えていかんなあ。

正八 ……。

多蔵 こんなにある本が全部金やつたらなあ。

正八 ……。

多蔵 お前の教育に注ぎ込んだ金に十分余りあるげな。

正八 ……。  
多蔵 何を書いとるんだ？ 物資が不足しとるのに紙の無駄遣いするな。  
正八 仕事だわ、執筆の依頼がきたんだ。  
多蔵 儲かりそうきやあ？  
正八 分らん。  
多蔵 何の話を書いとるんだ？  
正八 坊さんの話だ。  
多蔵 坊さんか、それはええ。

そこへ、玄関から畑中が入ってくる。

畑中 新美、おるか。  
多蔵 おるぞ。ここで作家のフリをしとる。  
畑中 あ、どうも、おじさん。  
多蔵 今日は呑んどらんのか？  
畑中 もう最近は無沙汰ですよ、入営しとるから。  
多蔵 おお、そうだったな。  
正八 お前、除隊はもつと先だろ？  
畑中 おふくろが危篤になつてなあ、一時除隊して戻ってきたんだわ。  
正八 そうか、お母さん、どんな具合だ？  
畑中 あと、二、三日、もつかどうかだな。  
正八 そうか……。  
畑中 おふくろの生きとる姿を見れてうれしかったけども、やはり死ぬ瞬間を見届けたい  
ろ。という気持ちもある。でも、俺がおる間に死んでくれというのもいくら身内でも不謹慎だ  
ろ。  
正八 (苦笑)  
多蔵 畑中、こんなところおらんで、ふささんの看病してやれ。  
畑中 まあ、ちよつと。  
多蔵 ふささんもえらい人生だったなあ。漸く落ち着けるわ。  
畑中 ……。

多蔵は玄関から出て行く。

畑中 俺の親父が自殺だっただろ。  
正八 ああ。  
畑中 物置で首を吊つとつてなあ、最初に見つけたんはおふくろだった。物置でひとり騒い  
どつたおふくろを見つけて、駆けつけていくと、おふくろが吊られたままの親父をなんや  
ら喚きながら叩いとつてなあ。

正八 ……。  
畑中 俺はしばらくそれを眺めとつたんだ。親父は酒浸りで死ぬかもしれんと予想はしと

ったで、おとなしいおふくろがあんなに激しく親父をたたいたのは、言葉にはできん、なんだ、ああ、虚しさいうんかなあ……。

正八 ……。

畑中 ……その時から、虚しさがなあ、ずっと俺の中から消えんでなあ、そのせいか知らんが、学校も休学を繰り返して、結局は卒業できずになあ。

正八 ……。

畑中 口だけは大きな事を言いながら、就職も適当なところに落ち着いて。

正八 ……。

畑中 そんな俺をおふくろはどう見とったんかのう。

正八 ……。

畑中 もしおふくろが臨終の際に俺のことを思い出しでもしたら、申し訳ねえなあ。

正八 ……。

畑中 ……。

正八 ……。

畑中 ……。

正八 ……。

畑中 こんな時、何も言わんのがお前らしい。

正八 ……。

畑中 ちいちゃんに会いたいなあ。

正八 ……。

畑中 神様も馬鹿だなあ、ちいちゃんよりも死んだ方がええやつはいっぱいおるのに。きつとあの世が寂しくてちいちゃんを呼びつけたんだろうなあ、神様がそんな身勝手だった

らこの世もこの世だわ。

正八 ……。

初枝が庭の方から現れる。手には折鶴を持っている。折鶴は六つあり、糸で繋がられ垂らされている。

初枝 先生、ごめんください。山本です。春休みにも先生は岩滑の方に戻られていると聞きまして。

正八 おう、どうしたんだ？

初枝 喜久ちゃんが亡くなって二年、和ちゃんが亡くなって一年、三月の春の日に亡くなったしまった二人の仏前に手を合わせてきたんです。そいだら、和ちゃんのお父さんに手紙を先生に渡してほしいと頼まれて、今日は気持ちよく晴れとるし、気持ちのいい風も吹いとるし、このまま先生のお家へお邪魔してしまおうと思ひ、こうして岩滑まで足を運ばせてもらいました。

正八 おお、そうか、三輪のお父さんが手紙をなあ。

初枝は手紙を取り出し、正八に渡す。

正八 その折鶴はどうしたんだ？

初枝 これは喜久ちゃんが折った鶴です。もう体もよう動かせんくなつとるのに、折るように鶴を折っとったんです。喜久ちゃん、鶴を折り続けて、折っとる途中に亡くなったとお母さんが仰ってました。喜久ちゃんが折った鶴、たくさんあるから持っていったとお母さんが六つ、色違いの折鶴を糸で縫っててくれ。

正八 ちょっと見せてくれ。

初枝は折鶴を正八に渡す。

正八 石川が折ったんか、見舞いには何度か行ったけど、鶴を折っとるのは見んかったなあ、覚えてないだけかもしれんが。

畑中 新美の生徒さんか？

初枝 はい。山本初枝と申します。はじめまして。

畑中 あ、畑中俊平です。はじめまして。礼儀の正しい子だなあ。

正八 山本はこの一年でえらく成長したなあ。苦手だった英語の成績も上がって、いい作文も書くようになって、いくらかふくよかになったしなあ。

初枝 ……。

正八 石川の折鶴、ありがとう。

正八は初枝に折鶴を返す。

初枝 喜久ちゃんの最期の折鶴は折りかけの鶴で、それをお母さんがとつても大事にされとりました。

正八 ……。

畑中 折りかけの鶴かあ……いかにいかに、今の俺には響いてくる。

畑中は正八と初枝から離れるように部屋の奥に引き下がる。

初枝 先生、喜久ちゃんは鶴を折り終る度に「ごめんなあ」と言っとったんですよ。「なんぞで謝る？」と聞いたたら、「鳥の卵を割ってしまったからなあ」と弱々しく笑って。

正八 ……。

初枝 安城に入る前の、喜久ちゃんがまだ元気で活発な女の子だった頃のこと、喜久ちゃん は家の近くにあるお寺の木の本に、鳥の巣を見つけたんです。喜久ちゃんはえらい興味を持って、学校からあがると毎日その巣を見に行ったんです。でも、下から見えるのは巢ばかりで卵がどんな色でいくつあるのか分からなくて、喜久ちゃんはどうしても見たくなくなってしまって、木に登ろうと届く木の枝に手をかけたんです。そいだから、その枝が揺れて、その枝が揺れたせいで他の枝も揺れて、他の枝の揺れたせいで巢のある枝が揺れて、巢の枝が揺れたせいで巢がひっくり返って、巢ごと地面に落ちてしまったんです。卵は全部で五つあったそうです。もちろん、五つ全部割れてしまって、呆然としとると、頭の上で親鳥の鳴く声が聞こえて、そいで怖くなって逃げるように家へ帰って……それから体

がめつきり弱くなつたと喜久ちゃんは言つとつたんです。

正八 ……。

初枝 喜久ちゃんは償うように鶴を折り続けて、「ちゃんと謝つとけばよかつたなあ、そいだら、もつと生きられたんかなあ」と嘆いとりました。

正八 ……。

そこへ、文夫が玄関から入ってくる。文夫はどこか殺気立っている。

畑中 おう、文夫か。

文夫 自殺じゃない！ 事故だわ！

畑中 いきなり何の話だ？

文夫 姉ちゃんは自殺したんじゃない！ 姉ちゃんが自殺で！ 腹の立つ、まことに腹の

立つ！ 正八が言いふらしたと鍛冶屋のおばさんが言つとつたぞ！

正八 ……。

畑中 新美が言うかやそんなこと……でも、ちいちゃん、自殺じゃないんか？ 東北で汽車に飛びこんだつちゅう、

文夫 違う！ そんなことあるか！

文夫は正八に詰め寄る。

文夫 姉ちゃんはお前のせいで死んだんじゃないぞ。

正八 ……。

文夫 お前との仲がこじれて死んだんじゃないぞ。

正八 ……。

文夫 お前のことで自殺なんかするか。アホなことを言いふらしおつて。

正八 ……。

文夫 なんで自殺なんて噂を流す？

正八 ……。

文夫 姉ちゃんが結婚してくれんかった腹いせだろ？

正八 ……。

文夫 姉ちゃんはお前に惚れたことなんか一度もねえ。

正八 ……ちいこは、本当に自殺してないんか？

文夫 何度も言つとるがや！ 耳聞こえんのきやあ！ それとも日本語分らん阿呆きや

あ！

正八 ……。

突然、正八は咳き込む。すぐにやむと思つた咳だがなかなか治まらない。

文夫 ……。

畑中 新美、どうした？

畑中と初枝が正八に寄ってくるが、正八は手で制し、縁側から庭へ下りて、そのまま出て行く。

初枝

——。

畑中 大丈夫か、あいつ。

初枝

……。

畑中 ……先生、結核……。

初枝

新美は確かにひよろっとしとるで、咳したくらいで結核だと思わんでもえええだろ。

初枝

……。

文夫 俊さん、何言つとるの？ あいつは結核を持つとる。ここのもんは誰もが知つとる。こつとだ、姉ちゃんも言つとつた。あいつの進学や就職が望むようにならんかったんは、結核のせいだ。

畑中 気のせいだろ。

初枝 ……今、先生の息…喜久ちゃんと和ちゃんと…同じ匂いが……。

畑中 それも気のせいだわ。息の匂いくらいで分かるわけないだろ。

文夫 俊さんには打ち明けと思つとつた。

畑中 俺は新美から何も聞いとらんぞ。だで、違う。結核なんて持つとらん。

初枝

……。

畑中 それよか、ちいちゃんのこと聞かせてくれ。

文夫

……。

畑中 なんて亡くなつたんだ？

文夫 ……姉ちゃんは…姉ちゃんは…北海道大学への研修旅行の帰りに汽車の中で…

…突然、心臓発作を起こして苦しくなつて、

畑中 心臓発作で、そんなに体が悪かつたかや？

文夫 姉ちゃんは人一倍、いや、二倍も三倍も、命を削るようになんばつとつたんだ……そ

いでで、体を壊したのかもしれない……。

畑中

……。

文夫 中山の家をつぶしてたまるかと姉ちゃんひとりが気負つて……その分…追いつまれ

とつたんだらう…睡眠薬がないと眠れんと手紙に書いとつた……もしかしたら精神安定

剤も……。

畑中 ちいちゃんが薬……心臓発作は薬も関係があるんかや？

文夫 薬のことはよう分からん。でも、前に丹羽先生から常用は危険だと忠告されとつた。

畑中 なんて忠告を無視する？ ちいちゃんがまだ医者卵だったからか？

文夫 卵だと！ 大阪一優秀な医者だぞ！

畑中 そいだら、なんで……。

文夫 ……姉ちゃんに手を差し伸べられんかった……俺も、誰も……だから、薬に頼つて。

畑中

……。

文夫

……。

畑中 ……ちいちゃんはそのまま汽車の中で？

文夫 いや、友達のおる青森で下車したんだ……そこで休養させてもらって……その人には風邪だと言いはったそうだ、ウイスキーとかぜ薬を飲んで、でも、やはりよう眠れなかったらしく……その時に……睡眠薬を………そしたら、急に容体が悪うなって………その三日後に……。

畑中 それがちいちゃんの最期か？

文夫 そうだ！ 汽車に飛び込んだりするか！ 病院の開業が目前でなんで自ら死なないかんだ！ それに自殺だったら俺への遺書が必ずあるはずだて！ どこにもない！ なかった！

畑中 ……。

文夫 久々に東京から戻ってきたら、こんなくだらん噂が広がって……。

風が吹くような時間があって、正人が戻ってくる。正人は梅の木の枝を持っている。

畑中 新美。

正八 ……おう、もうなんともない……落ち着いた。

畑中 お前、平気か？

正八 ……。

畑中 ……。

正八 ……見ろ、梅の花が咲いとったぞ……誰が折ったか、これは落ちとった……せっかく咲いたのに折れてしまったら……元も子もないなあ……。

と、しかし、正八は再び咳き込む。

初枝は正八に近づき、正八の背中をさする。咳が止まない正八は初枝に離れるよう促すが、初枝は離れずに正八の背中をさすり続ける。正八は強く初枝を押し。初枝は押されてよろけるが転ばない。

漸く正八の咳は治まる。

初枝 先生、きっと大丈夫です、大丈夫ですよ。先生の息、私、大丈夫ですから。

正八は膝に手をつき、上半身を俯けたまま。

暗転。

⑤

一九四二年三月。夕暮れ。

正八が机に向かい書きものをしている。不意に手を休めると股間を気にし出す。股間をグッと握ったり、揉むような仕草。

正八 ……。



正八は大きいため息をつき、虚空を見つめる。そしてまた股間に目を落とす。そこへ、多蔵が玄関から入ってくる。多蔵は上機嫌で小踊りしながら入ってくる。

多蔵 (小踊りしながら) ここにある本が皆、金に見える。

正八 (小踊りが気になる) ……。

多蔵 (小踊りしながら) 『良寛物語・手毬と鉢の子』、再版一万部の印税、六五〇円の小切手が届いたぞ。

正八 (小踊りが気にくわない) ……。

多蔵 (小踊りしながら) 俺の助言通りだったな。やはり坊さんの話だわ。

正八 (小踊りに苛立ちはじめ) ……。

多蔵 (小踊りが止まらない) お前は執筆で忙しいだろうから、俺が現金に換えてきてやるか、仕方のない。

正八 それは岩滑の伝統芸能か？

多蔵 は？

正八 それとも、新しい趣向のお神楽か？

多蔵 何言っとんだ？

正八 そのふざけた踊りのことだわ。

多蔵 誰が踊るとるんだ？ アメリカとの戦争が始まったばかりだで、不謹慎だぞ。

正八 ……。

多蔵 (気がついて) おお、体が勝手に動いとした。

正八 ……。

多蔵 新美先生、次はどんな話を書くんだ？

正八 ……都築弥厚っちゅう明治用水を作った人の伝記執筆を依頼されて、

多蔵 いかん。坊さんの話を書け。そんな地味な話は売れん。法然さんとか親鸞さんとか偉い坊さんにしろ。

正八 出版社から依頼されたんだわ。他にも童話作家の与田準一さんが童話を何篇か送ってくれといってくださいってなあ、

多蔵 ありがたいことだわ。お前どんどん書けよ、坊さんの話を。

正八 ……。

多蔵 人には向き不向きがある。お前が戦場に行っても何の役にも立たん。足手まといになつて真つ先に撃たれてしまうだろ。

正八 ……。

多蔵 お前ひとりが残されてしまったのう。益吉も畑中も中山さんとこの文夫も皆、戦争へ行った、それは適材適所っちゅうことだ。だで、戦地へ行った心持ちでお前も死ぬ気で書け。

多蔵は小踊り気味で出て行くこうとする。

正八 親父。  
多蔵 なんだ？  
正八 母さんは何歳まで生きとったんだ？  
多蔵 おつ母は生きとろうに。  
正八 俺を産んだ、りゑ母さんの方だ。  
多蔵 ……ああ、それか…でも、なんで聞く？  
正八 俺も母さんと同じ歳になったんだらうか。  
多蔵 ……あいつは二十九で死んだ。  
正八 二十九か、次の夏で母さんと並ぶなあ。  
多蔵 ……お前の兄貴は二週間しか生きれなかった。  
正八 ああ…。  
多蔵 りゑの話はもうせんぞ、俺は思い出したくない。  
正八 俺は思い出してしまふ。春になったからだ。  
多蔵 ……。  
正八 母さんが春の花に春の風を吹かせようと言って一緒にふうーと息を吐いたんだ、はつきりせん記憶だけでも、あの時咳き込んだんは俺だったか、母さんだったか、それとも、俺も母さんもどちらもだったか…。  
多蔵 ……。  
正八 俺は渡辺正八じゃなくて、新美正八だ。早死にする新美家のもんだ。八歳の俺を、母さんの、りゑ母さんの継母の、あのばあさんの元へひとり養子に出したんは俺が母さんと同じ咳をしとったからだらう？ 生まれたばかりの益吉に俺の結核をうつすわけにはなあ…でも、すまんかったなあ、幼き俺はあのばあさんと暮らすことができて、結局、親父とおつ母が育てることになって。  
多蔵 なんだ、今更、お前…そのことは何へんも説明しただらう。  
正八 ……。  
多蔵 お前を志もばあさんのところに養子に入れたんは、お前を新美家の跡取りにするためだ。新美家には田と畑と少しの山があった。それをもらうには、お前が新美家に入る必要がある。それに、志もばあさんからお前を養子に欲しいと頼んできたんだ。後妻で新美家に嫁いだ志もばあさんは夫の新太郎さんに先立たれてまって、新美家との繋がりが薄い。子供もおらんで跡取りになるんは世間の目が厳しい。だで、お前をもらっとけば世間的にもよくうつるつちゆうことだな。  
正八 俺はあのばあとおるのが嫌でなあ、日が暮れても家に入らんで、ひとり外におつたら春の風にあたって、風をひいてしまったんだ。  
多蔵 なんて、また恨み言をいう。  
正八 ……。  
多蔵 志もばあさんのところにおつたのも三ヶ月かそこらだろ。  
正八 春の三ヶ月だった。俺は毎日花に息を吹きかけて、吹きかけて、死んだ母さんと一緒に息を吹きかけて、何本もの花を枯らした、枯らしてしまつた…。  
多蔵 何を言つとるんだ、さっきから。  
正八 ……俺はなんでこんな体に生まれてしまつたんだ。

多蔵 ……。  
正八 ……。  
多蔵 本の読みすぎだわ、阿呆が。  
正八 ……。

多蔵は玄関から出て行く。  
正八は服を脱ぐと、禪一丁になる。  
そして、自分の全身を眺める。

正八 ……。

そこへ、玄関の外から初枝の声が聞こえてくる。

初枝 (声) 先生、いらっしゃいますか。

正八 おお、おお、その声は、山本か。

初枝 (声) そうです。頼まれとった童話の清書、漸く終わりました。

正八は禪姿のまま、玄関の戸を開ける。

初枝 |。

正八 わざわざ、すまんなあ。まあ、どうぞ、あがってくれ。

初枝 ……ま、また、あ、後で…お伺い…しましょうか？

正八 平気だ。俺もちようど一息入れようとしたとこだ。

初枝 ……。

正八 卒業式のすぐ後に会うっちゅうのも照れ臭いなあ。

初枝 ……。

正八 山本、お前、あからさまに照れ過ぎだぞ。

初枝 え、あ…げ、原稿です。

初枝は正八を見ないように原稿を渡す。

正八 ありがとう。でも、卒業式の前日に頼む俺もどうかしとったなあ。

初枝は正八を見ないように部屋に入り、正八に促されて座る。

正八 (原稿を見て) 相変わらずきれいな字だな、俺の童話が実際より素晴らしく見える。  
一年生の頃はえらい字を書いとったのになあ。

初枝 ……。

正八 誤字脱字が結構あっただろ？

初枝 ……あ、はい。

正八 山本が直してくれるだろうと見直さんかったんだわ。  
初枝 ……。  
正八 お礼の代わりに本ならいくらでも持っていつてかまわんぞ。  
初枝 ……。

初枝は正八を直視できずに立ち上がって本棚の方へ行くが、何かを決意したらしく、正八の前に戻ってきて姿勢よく座る。

正八 なんだ、少し肌寒いなあ。

初枝 (正八から目を逸らさずに) 先生、そんな行為は今日でなくてはなりませんか？

正八 ん？

初枝 私はこの四月から愛知県立青年学校教員養成所の女子部に進学します。

正八 そんな改まらないでも知っとるぞ。

初枝 私はこれからも続けて、先生の書いたものの清書をさせてもらいたいと思ってるんです。

正八 そうかや、ありがたいなあ。

初枝 でも、学校にはよう行かれんし、ここに伺うことになるんだと思います。

正八 わざわざ来てくれるんかや？

初枝 伺います、先生のご迷惑でなければ。

正八 迷惑どころか、歓迎だぞ。

初枝 でも、そんな行為は私が養成所を卒業するまで待ってもらえんでしょうか？

正八 そんな行為ってなんだ？

初枝 (正視できなくなつて目を逸らす) からかわんでください、私だって多少の知識はあります、もちろん経験はありませんけど。

正八 (初枝の顔を覗き込むように) 何を言っとるんだ？

初枝 (正八が知らぬ間に近くにいたので驚く) おおいつ、おおいつ、おおいつ。

正八 なんだ、さつきから。

初枝 先生。

正八 ん？

初枝 夫婦の契りを交わす前にそんな行為に及ぶというのは、

正八 あ、俺、裸じゃねえか。

と、漸く気がついて、慌てて服を着始める。

正八 (服を着ながら) すまんすまん、考え事をしとつたから、ついついこの空でなあ。

初枝 ……。

正八 みつともないもんを見せてしまったなあ……。

初枝 ……。

正八は着終えて、座る。

正八 すまんかった。  
初枝 ……。  
正八 何の話だったかや？  
初枝 ……。  
正八 そんな行為がどうの、  
初枝 もうええです。  
正八 ええんか？  
初枝 ええです。  
正八 ……。  
初枝 ……。  
正八 ええんだったら、ええか。  
初枝 ……。  
正八 (机の上にある書きかけの原稿を手に取り) 大分、行き詰まっとるんだ新作、取材しても話の種になるようなもんがなくてなあ。  
初枝 ……。  
正八 唯一、膨らみそうなんは都築弥厚の前を狐が通り過ぎたつちゅうくらいだわ。  
初枝 ……私も創作をしたんです。  
正八 おお、そうかや。  
初枝 石川喜久ちゃんの鳥の話、覚えておられますか？  
正八 卵を割ってしまった話だな、覚えとる。  
初枝 書いたんはその続きです。  
正八 おもしろそうだな。  
初枝 喜久ちゃんが割ってしまった卵の親鳥が喜久ちゃんの頭の上を飛んでくるんです。  
喜久ちゃんは「ごめんなさい」と謝る。そいだら、親鳥が「なんであんたは謝るの？」て聞いてくるから、喜久ちゃんは「卵を割ってごめんなさい」とまた謝って、喜久ちゃんが折った鶴をあの子たちの代わりにと差し出すんです。でも、親鳥は「そんなことあったかや」と言っつてびゅーんと飛んでいっつてしまう……というお話を書いたんです……。  
正八 ……。  
初枝 ……最初は折鶴は命を与えられ親鳥と共に飛んで行くつもりだったんだけど、書いていくうちに意外な結末になってしまつて、喜久ちゃんに申し訳ない……。  
正八 淋しいなあ。  
初枝 ええ、私もとつても淋しくなつてしまつて……淋しくなつてしまつたんですねえ……和ちゃんにも創作をと思つとつたんですが、やめました……。  
正八 ……。  
初枝 ……すみません。おかしな話をして。  
正八 お前は優しい子だなあ、ずっと石川と三輪のことを気にかけて。  
初枝 ……。  
正八 ちよつと風でも入れるか。

と、正八は縁側の戸を開ける。

初枝 あ、そうだ。

初枝は靴から本を取り出して、さらにその本から挟まれていたしおりを取り出す。そのしおりは紙に包まれている。

初枝 (本を差し出す) 先生、お借りしていた本です。

正八 (本を受け取る) ああ。

初枝 (しおりを見せて) これ、お花のしおりですかね、きれいに紙に包まれてありました。でも、もうお花は今にも壊れそうで……。

正八 (しおりを受け取って) ……。

初枝 そういや、何年か前に先生のこの離れに初めてうかがった時、庭に花びらの欠けた花を埋めたんです。

正八 花を埋めたんか……どこに埋めたか憶えとるか？

初枝 あの辺りでしょうかねえ。

正八は庭に下りて、初枝が示した辺りに行く。

正八 ここかや？

初枝 もうちよつと奥だったかな、(正八は奥へ) あ、手前か(正八は手前に)、あれ、右の方、(正八は右へ) いや、あれ、私、本当に埋めたんかな……いや、埋めた、埋めました。

正八 ちよつとここに来て、一緒に探そまい。

初枝 はい。あ、靴をとってきます。

初枝は玄関に行きかけるが、

正八 かまわん、裸足で。

初枝 でも、

正八 かまわんよ。

初枝 ええんですか？

正八 ああ、むしろ裸足がええ。

初枝 ……。

初枝は靴下を脱いで、庭に下りる。

正八 ……。

初枝 えーつと、確かここだったと思います。あれえ、違うか、どこだろう……あ、ここだと思います。

正八 ここかや。

初枝 きつと……。

初枝は掘ろうとするが、正八に止められる。

その際、正八は初枝の手を持つのだが、そのまま離さずにいる。

正八 掘らんでええよ。

初枝 掘らんでええですか？

正八 うん。

初枝 ……。

正八 ……。

初枝 ……先生、手を……。

正八 すまんけど、少しだけこうさせてくれ。

初枝 え。

正八 ……。

初枝 ……。

初枝はどうしたらいいのか分からず落ち着きがない。

正八は初枝の手を握ったまま、初枝が掘ろうとした辺りを見ていたが、ふと初枝の足に目がいつて、

正八 お前、なんで裸足でおるんかや？

初枝 先生が裸足でええと。

正八 (笑って) ほうかほうか。

初枝 ……。

そこへ、玄関から志んが入ってくる。それに気が付くと、正八は手を離す。

志ん 兄ちゃ。

正八 ……。

志ん 兄ちゃの禪に血が、血がついとったで……。

正八 ああ、もうおしまいだわ。

志ん 何を言っとる？

正八 尿に血がまざとってなあ、きつと腎臓結核だろ。

志ん 医者には行ったんか？

正八 まだ行つとらん、でも、もう観念しとる。

志ん 観念て、まだ医者にかかってもおらんで。

正八 ……。

志ん 兄ちゃ、すぐに丹羽先生のところに行こう。歩かれんなら、リヤカーに乗せていくからのう。

正八 医者にはかかりたくないなあ。

志ん 後生だから、行こう。

多蔵が玄関から入ってくる。

多蔵 おい、行かんのか？

正八 親父。

多蔵 なんだ？

正八 小切手を現金にしてきたんだな。顔が緩んだままだ。そんな顔で病院に行くやつはおらんぞ。

多蔵 何を言っとるんだ。

正八 俺の本の印税、貯金はすべて親父にいくよう遺言書に書いておくからな。

多蔵 ええから、来い。

多蔵は庭に下りると正八を掴んで、玄関の方へ引っぱっていきこうとする。

正八 待て待て、分かった分かった、行くから行くから、ノートと本を持たせてくれ。

志ん 本などいらんやろう。

正八 待っとる間に何をするんだ？

志ん 待たせるか、一番に診てもらおう。

正八 もう変わらんで。

志ん そんなこと言うもんじゃねえわ！

多蔵 どうでもええから早くせえ。

正八はノートとペンを手に取り、本棚とその辺りに積まれている本の山を見る。

正八 ……。

志ん 兄ちゃ、何しとるんだ！

正八 本を見とるんだわ。

志ん ……。

多蔵 ……。

正八 ……最近、花が好きでなあ、見た花や本に出てきた花をノートに、ノートに書きとめてなあ……、(ノートを開いて)雪柳、いすらの花、もくれん、れんぎょう、馬酔木あせびの花、

梨の花、えんどうの花、山吹の花、きんせん花、えにしだ、藤、虞美人草、アネモネ、いぼたの花、柿の花、うつぎの花、ざくろの花、つるばらの花、アマリリス、カーネーション、百合、ダリヤ、もっこく、ねずみもち、サボテンの花、トリトマ、紫陽花、ねむの花、ひまわり、蓮の花、芙蓉、白萩、松の花、梅の花……まだ他にも書いてあるんだけどな、花の美しさに惹かれるのはもっと歳をとってからだと思っとったんだけど……三〇を迎える前になあ……リヤカーなんてやめてくれよ。歩いていける。

多蔵 馬鹿、乗っていけ。



志ん そうだ。  
正八 恥ずかしいわ。  
志ん 恥ずかしいなんて言っとる場合じゃない。  
正八 歩いていけるて。  
志ん また小便から血が出るぞ。禪洗うのは誰だと思っとる。  
正八 禪の心配か。  
志ん 禪も心配だわ。血は落ちづらいからのう。  
正八 そんなもの捨てちまえ。  
志ん 父ちやが怒るんだわ。  
正八 まったく吝嗇だな。  
初枝 先生！ 早く行きましょう！

と、初枝は裸足のまま部屋の中に入ってくる。

正八 お前、足も拭かんで。  
初枝 リヤカー、私も引きますから！  
志ん すまんなあ、父ちやも歳だでなあ、心強い。  
正八 山本、ええって。  
初枝 そんなに細い体で歩かれんでしょう！  
正八 平気だって。  
初枝 いかんです！  
多蔵 ええから、行くぞ。

多蔵と志んと初枝は渋る正八を連れ出して玄関から出て行く。  
暗転。

⑥

一九四三年三月。午前。

正八は下手の部屋で敷いた布団で寝ている。  
上手の部屋に多蔵がいて、落ち着かない。

多蔵 ……。

座机の上には正八が刊行した童話集『おぢいさんのランプ』が置かれている。  
多蔵は座り、その本を手取るが、中を読もうとせず表紙だけ眺めて、また机の上に戻す。多蔵はまだ落ち着きがない。  
そこへ志んが玄関から入ってくる。志んは正八の近くに座る。

志ん ……。

志んは上手の部屋に移動し、二つの部屋の間の戸を閉める。

多蔵 ……。

志ん ……。

多蔵 お前、正八の書いたもの、読んだことあるかや？

志ん ない。父ちゃは？

多蔵 俺もない。

志ん ……。

多蔵 ……実はある。

志ん ……。

多蔵 『父』ちゅう題名の原稿を見つけてしまっつてな、ついつい読んでしまったんだ、その

父親というのがほんとに性根の悪い奴でな、正八はこう俺を見とるんかと嫌になっつてな

あ、もうそれから読まんようにしとる。

志ん 実はわしもある。いくつか読んだわ。

多蔵 ……。

志ん 兄ちゃの童話に出てくるおつ母は心のきれいな人ばかりでな、わしへの当てつけか  
と思っただわ。それから、わしも読まんようにしとる。

多蔵 ……。

志ん ……。

多蔵は再び童話集を手取る。

多蔵 この童話集は売れんかったのう。坊さんの話を書けと言ったのに。

志ん 兄ちゃはよう書いた、小便から血の出した後で。

多蔵 前と同じで仕事にも行かれんようになると思っつとった。

志ん でも、休むことなく学校に勤めて。

多蔵 痩せ細った体は相変わらずだけど、なんでか肌艶が良くなって見えてなあ。

志ん 創作意欲が枯れんと苦笑いしとった。

多蔵 また童話集が出せると印税を期待させおつて。

志ん 職人の倅が作家先生になつたんだ。

多蔵 正八をすくいあげてくれた人がおつたんだらう。

志ん でも、年明けから急に体を崩して、冬の寒さが身に応えたんかのう。

多蔵 夜更けまで書きものをしとつて。

志ん もう喉もやられて、声を出すのが辛そうだわ。

多蔵 耳を近づけんと何を言っつとるか分からん時もある。

志ん 丹羽先生はもうだめだと仰られた。

多蔵 ……。

志ん 文学の才能に恵まれとつたのにほんとに惜しいと嘆いとられた。

多蔵 ……。

志ん ……。

多蔵 ……。

志ん りゑさが亡くなる前もこんなにつらそうだったんか？

多蔵 ……。

志ん これで益ちやにも戦争で死なれたら……。

多蔵 ……。

志ん ……。

多蔵 ……。

志ん さて、兄ちやが目を覚ます前に店に帰らんと、不機嫌になつてしまふ。

多蔵 ……。

志ん 生徒の見舞いもほとんど断つて、わしらにもあまり来るなと言つて……うつるのが心配だから……教員を指しとる、山本さんいうたか、何遍も見舞いにきてくれとるのに、あの娘ももう通さんでくれと……。

多蔵 ……。

志ん ひとりで逝きたいんかのう。兄ちやのつらそうな目がなあ、時折、わたしには恨むような目つきに見えてなあ、えらく胸の辺りが痛くなる……わしは兄ちやをひとり、志もばあさんのところに養子に出したのをずっと後悔しとる、かわいそうなことをしてしまつた……。

多蔵 ……そんなこと言うな。

志ん 父ちやは何も思わんのか？

多蔵 ……。

志ん ……。

多蔵 ……それはもうええ、ええだろう。

志ん ……。

多蔵 戻るぞ。

多蔵は玄関から出て行く。

志んは寝ている正八の傍に座る。

正八は手で志んを呼ぶ。

志ん ……なんだ？

正八は手の仕草で縁側の戸を開けてくれるよう訴える。

志ん ……縁側の戸を開けるんかや？ でも、風が入ってきてしまうだろ。

正八は大丈夫という手の仕草をする。

志ん ……かまわんのか、仕方ない……。

志んは縁側の戸を開ける。

志ん 今日少し風の強い……。

志んは正八が寝ている部屋に戻る。

志ん 兄ちゃ、ちいと店の様子見てくるからのう。

志んは玄関から出て行く。  
しばしの間。

正八は非常にゆっくりと起き上がると、歩くのもやっとの状態だが、縁側まで行き、腰かける。そして、外を眺める。

そこへ、初枝が花を持って庭の方から現れる。

初枝は正八の寡れた姿を見て驚く。

初枝 ——。

正八は初枝に気がつき、目を向ける。

初枝 ……先生、山本です。先生のお母様からは止められたんですが、どうしても先生にお会いしたくて……。

正八 ……母さんかや？

初枝 え？

正八 母さんかや？

初枝 ……。

正八 ……兄さんを抱えて、小さな花の蕾を持って……来てくれたんかや。

初枝 ……。

正八 ……ちいこは……ちいこはおらんのか……。

初枝 ……お姉さんは……。

正八 ……まあ、そうだな、あいつが来るわけない……。

初枝 ……。

正八 ……俺が書いたもの……少しは読んでくれたかや……。

初枝 ……はい。

正八 ……そう。

初枝 ……私、

正八 もう、書けん……書けんなあ……。

初枝 ……。

正八 ……。

初枝 ……そうですねえ……。

正八 ……。

風が吹いて、そのせいで正八がゆつくりと床に倒れかけたところで、  
暗転。

おわり

引用文献

- (※1)  
新美南吉『校定 新美南吉全集 第十二卷』、一九八一年、大日本図書株式会社、二一九頁
- (※2)  
新美南吉『校定 新美南吉全集 第九卷』、一九八一年、大日本図書株式会社、二二二頁
- (※3)  
新美南吉『校定 新美南吉全集 第二卷』、一九八一年、大日本図書株式会社、二六二頁
- (※4)  
新美南吉『校定 新美南吉全集 第九卷』、一九八一年、大日本図書株式会社、七〇頁
- (※5)  
新美南吉『校定 新美南吉全集 第九卷』、一九八一年、大日本図書株式会社、六八・六九頁
- (※6)  
新美南吉『校定 新美南吉全集 第九卷』、一九八一年、大日本図書株式会社、六九頁